
異世界の迷子？

Bune・Andromalius・Halpas

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の迷子？

【Nコード】

N8470H

【作者名】

Bune・Andromalius・Halpas

【あらすじ】

主人公が異世界に現れて、その世界は混沌となっていく。四つの強国がひしめく中、主人公が暴れまくり、強敵を倒し、国を破ったり、フラグたてたり？

ブローグ

森の中を走っていた。今は夜、らしい。周りの暗さにも目がなれ、枝の隙間から漏れてくる光（月の光だろう）のおかげで木々を避けてはしれている。

「はあ、はあ、はあ、はあ。」

正直疲れた、何故自分がこんなことをやり続けなければいけないのかと疑問に思うことは多々ある、が。

「まちやがれ〜〜！！！」

「この、糞餓鬼が〜〜！！！」

追ってきていた。数人の鎧を着た男たちが、右手に剣を持って追いかけてきていた。

「何でこんな事になっているんだよ！」

わからない。どうしてここにいるのか、どうして追われているのか、そして……。

「ここはいつたいどこなんだ〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！！」

場所もわからなかった。

プロローグ（後書き）

初の投稿です、プロローグですが読んでくださった方々まことにありがとうございます。毎日投稿、とまでできる技量はありませんが、内容のほうは頑張らせていただきます。

第一話：回想・前進

俺の名前は神無月華流兎（かなづきかると）、神無月家の三男で高二だ。神無月家というのは、昔このあたりをしきっていた貴族みたいなもので今も結構な力を持っている。一番上の兄貴が神無月家の当主を受け継ぎ、もう一人の兄貴はある会社でうまくやっているらしい。らしいというのは、あまり連絡をよこさない上にひよっこり帰ってきてはいつの間に行ってしまったているからだ。それから妹も二人いる、上のほうはともしつかりとしている、今年高校受験だが心配する必要が無い様なやつだ。下のほうはまだ小学生でかわいさと元気が売りの自慢の妹だ。親父とお袋はもう他界している。

家のことはこのぐらいにして、次は学校や友人のについて。まず、俺が通っている学校の偏差値はこのあたりでは上の下ぐらい、まあそれでもかるく合格できたが。校舎はいつも綺麗にされているし、通ってきている人達も根のいいやつばかりと結構いい学校だ。友人は幼馴染が三人とクラスメイトが四人、先輩と後輩にそれぞれ一人づつ。

そして、俺は日本にいたはずだった。

そんなかんじで普通に過ごしていた俺が何で、

「なんで森ん中にいるんだよお」

どこお見渡しても木、木、木、これを森といわずしてなんというんだああああああ。とか何とか絶叫したくなるのを何とかこらえながらも周りを確認する。昨晚、鎧の男たちからなんとか逃れた俺は手ごろな木に登って追っ手がかかっている可能性もあると思っただけをばさみつつ警戒していたが、いつの間にかぐっすりと眠っていたらしく起きたらもう朝だった（昼かもしれないが）、そんなこんなで現状の把握や回想をしたりして今に至るわけだが……。

「第一に此処は何処か、第二にどうやって戻るか、第三に戻るための情報をどうやって知る、もしくは集めるかだな」

まずは順序を決める。なるべく深く考え、適当にやっていく。それが俺の進む道だぜ！！

「とまあふざけてみても意味無い……か」

とにかく考えるか。まず此処は森だ、俺の住んでいる地域には林や森のようなものは無かったはずだ。なら、結構遠くまできたと考えるのが妥当だが……。

「そんなに遠くまで出かける予定は無かったはずだ、それに、あんな鎧を着込んだ男たちが現代の日本にいるだろうか、ていうか俺はどうやって此処に着たんだ!？」

思い出せない、記憶にもやがかかっているようなとかそんなものじゃなく、全くもって思い出せないのだ。

「まあ、思い出せないなら今は深く考える必要は無いか。とりあえず人を探すか、色々と確認しなきゃいけないし」

そう言いながら木を降り、歩き始める……前へと。

「いい人に会えたらいいなあ」

第二話：カーヴェレアト

人間はあまりに空腹になりすぎると倒れてしまうというが……。

「まさか体験するとは思っていなかった…」

ただいま絶賛行倒れ中だった。

今朝あの木から歩き始めてから約十四時間、人に会えず家も見えず、現在に至ってしまった。

「そうして誰にも知られずに……。て、しゃれになんねねねねねねねえええ」

だめ、なんかもうおかしなテンションになってきた…。

「俺、こんまま死んじまうかな…」

意識が朦朧となってきた、なんだか目の前が暗くなってきた……

…。

「うつろ～ん」

「ん、起きたみたいだな」

目の前には男がいた。二十代後半から三十代前半だろう、気前の良さを感じる。

「あれ、俺は一体……（ギョルル……）っ！！」

「はっはっは、どうやら腹が減っているようだな。夕食の準備ができたから様子を見に来たわけだが、お前の分もある、一緒に食おうではないか」

「どうもすみません。お言葉に甘えさせてもらいます」

「いいって事よ」

「それでその」

「じゃあとりあえず飯持つてくるから大人しく待つてろよ」

「いや話を……」

「飯の最中でいい、じゃっもう行く」

ボタン！

勝手に行きやがったよ、まあ少しは話を聞いてくれているみたいだからいいけど。

「にしても、殺風景な部屋だな。ベッドだけとは」

部屋はとても簡素だった。必要最低限、それをモットーとしているようだ。それとも、ただ単にお金が無いのか……。そうして待つこと二、三分。

「わるいわるい、この部屋にテーブルが無いのをすっかり忘れちゃった。向こうの部屋に準備していたからそっちで食うぞ、移動するぐらいの体力は残っているだろ？」

「わかりました、ところで此処は一体……」

「それも含めて話してやるから、ほら、早く行こうぜ、飯が冷めちゃう」

そついつて先に彼は行ってしまった……………。

「て、置いて行くなよおおおおおおお」

~~~~~

俺は今とても幸せな気分となっていた。

「すごく美味しいですよ、こんなものいままでに一度も食べたことありませんよ」

「そんなのカルトがそんだけ飢えていたって事だ」

「ほふへふへ……、ありがとうございますアインハーディさん」

「アデイでいい」

「わかりました、ところで」

「ああ、この世界のことだな、お前が異世界から来たってんなら話しておかないとな」

「異世界かどうかはまだ確証がありませんけどね」

「まあとりあえずは知っておいたほうがいいだろう、今後のためにも」

「そうだ、帰り方が分からない今、この世界のことをなるべく知っておかなければならない。」

「帰る方法を探すためにも……………」。

「この世界は一般ではカーヴェレアトって呼ばれている」

俺は進むしかないんだ。

## 第二話：カーヴェレアート（後書き）

これからは週一ぐらいで載せていきます、学業とかもあるんでゆっくり落ち着いて書かせてもらいます。

### 第三話：解説

「この世界はカーヴェレアトと呼ばれていて他にもモンスターばかりの世界や天使がいる世界など、異世界があることは確認されている。

この大陸には四つの大国がある、ここはその一つのバーミリア王国のはずれにある村のひとつでサーズド村だ。

カルトはこの村の近くにあるマヨイ森に入っすぐのところで倒れていたんだ。

マヨイ森は他のところにもあるんだが多くの人はマヨイ森の存在を認知していない。

いつから発生していった理由でマヨイ森っていう名前なのかは俺は知らない。

ただ、マヨイ森に長く居つづけるとその人物が帰ってこなくなるらしい。

そんな森に年に一度、国から二、三十人ほど使者が来て儀式をやっている。

それがおとついあったってわけだ。

ちなみにだが、俺はその儀式を見物しようと思って此处に来たんだが、見ることもかなわずおい返されちゃったつうことだ。

それで儀式の終わった昨日に何か残っていないか森に行ってみたらお前が倒れていたんだ。

次に国の関係なんだが………、これも必要か？」

「そうだなあ…、やっぱりそういったことも知っていた方がいいだろう」

これから何をするにも世界情勢がどうなっているか知っておく事も大事だろう。

「じゃあ簡単に説明すると、このバーミリア王国は基本的に農作業に力を入れている。商業も盛んなほうで経済的にも豊かなほうだ。軍事のほうも良く鍛えられていて四大国の中で一、二を争えるほどだ。しかし、貴族たちがそれなりにでしゃばっているせいで治安などがそこそこ悪い、主に貴族を狙った盗賊やらのとばっちりを受けたりなどだ。

次に他の国を軽く紹介すると、バーミリア王国と同盟を結んでいるリガードル商国、王国と商国に敵対しているラーディアス帝国、これらの国の争いに介入せず中立を維持し続けるヘルディガブ魔国とある。魔国といっても魔物やそのハーフが他の国に比べて多く住んでいるだけで特に害は無い。

思いつくだけ言ってみたが他に気になることが有ったらいつでも聞いてくれ」

そう言っアディは話をこっちにふってきた。

「わかりました、今は特にありませんので今のことを少し話しましょう」

「そうだな」

「まず、さっきの話で確信しましたが俺は異世界から来ました」

「その話しだつたら今は信じることにしている」

「というわけでこっちの世界のお金を持っていません」

「そりゃあ異世界からきたばっかだもんな…」

「帰る家も有りません」

「とりあえずはこの家に泊まる事になるな」

「今後どうしたらいいと思う、教えてくれないか？」

「それを俺に振るなよ！！自分で決めるしかねーだろ！！」

「そんなあ、あなたが此処に連れてきたんじゃないですか」

「倒れていたお前を此処まで運んできたただけだろうか！！」

「うわ~~~~、誘拐されちゃったよ~~~~う」

「恩人に向かってえらい失礼だなあ！！」

「もうお嫁にいけない……………」

「婿の間違いだろうが！！そして俺が何をしたっていうんだあああああ！！」

「昨晚はすごかったね。俺、あんなの初めてだよ」

「お前はぐっすりと眠っていただけだろうか！！」

「何があつたかはきかないんだ？」

「んなこと知るかああああああああああああ！！！！！！！！！！」

はあ、はあ、何なんだよこいつ、絶対に故意でやっているだろこいつ。

「どうかしたのかアディ、そんな怖い顔して」

「ちょっと疲れたんだよ、誰かがのりくらりと話をずらすせいだな！」

「あははは、わざとやっているからそりゃ疲れるだろ」

「やっぱりわざとかあああああああああああ！……！」

こいつは色々な意味で厄介だ、助けるんじゃないかな……。

「そっぴや口調が少しくだけたじゃないか」

「一度からかいあったやつを友として認めているからな」

「何て嫌な認められ方だあああああ！……！」

「これからも、続くよ」

「何が！？」

「くっくくくくくくく」

「何なんだよおおおおおおお」

俺はどうやらとんでもないやつを拾ってしまったようだ……

.....  
o

#### 第四話：魔力と気力（前書き）

期末試験があつたため二週間ほどあけてしまつてもうしわけございませんでした。

これからもこういつたことあると思いますができるだけ投稿するようがんばつていこうと思います。

#### 第四話：魔力と気力

「なあアディ、俺は何をしたらいいと思う」

「さつきも言ったが自分で決める、俺は助言するだけだ」

「そうだなあ、まずは金かな。アディは何か手っ取り早く金を稼ぐ方法を知らないか？」

「一つある、ギルドに所属して依頼をこなせばいい」

「へえ、どういう依頼があるんだ？」

「人助けや雑用からはじつまで、護送やモンスター退治、用兵みたいなものもあるな」

「じゃあ、まずは雑用や弱いモンスター退治といこうか」

「腕に自信があるならモンスター退治のほうがいいぞ、慣れたら結構らくだからなあ」

「わかった、ところでそのギルドはどこにあるんだ？」

「この村から王都の方に歩いて二日ぐらいのところに有る町にあつたな……」

「それじゃあ一緒に行こうか、どうせ暇なんだろう？」

「まあな、元々儀式が気になってきただけだし、お前のことが気になるからな」

「ありがとつ、それじゃあまずは準備からかな？」

「それならもうすましている、元々やることが少なかったから荷物ももう固めてある」

「そうなのか、だけどそろそろ日が沈むころあいだし明日の朝に出るとしよう」

「そうだな、他に何か聴きたいことは無いか？知っていることだつたろ答えられるぞ」

「ああ、それじゃあ一番気になっていたことなんだが………」

「何だ？」

「やっぱ魔法とかそいうやつであるのか？」

「ああ、あるぞ――

やっぱりあるのか、覚えられそうなら覚えていたほうがいいだろう。役に立つだろうし。」

――五種類ぐらい」

「へえ、思ったよりあるんだな、どういったものなんだ？」

「まあ簡単に言えば、魔力を使う魔法、気力を使う気硬法、自然を操る然法、自分の意思を具現化させる念法、体を変形させる変化の計五つだ」

「色々あるんだな、覚えやすそうなのと無いのか？」

「魔法と気硬法かな、この二つは才能が無くても修行を積み使えようになるからなあ」

「そうなのか…、他のやつはどうなんだ？」

「先天的な才能に加えて修行をしないと無理だな」

「わかった、ところで魔力と気力の違いって何だ？」

「空気中にあるオドを練って作られたエネルギーが魔力、生命力から練ったものが気力だ。」

『全を知るは魔力、個を知るは気力』っていう言葉が受け継がれているな」

なんか簡単そうで実は難しいって言うパターンかな。

とにかくまずは使えるようになった方が良さそうだな、教えてもらえるうちは教えてもらわないと。

「それでどうやったらそれらの力は使えるようになるんだ？」

「感じるんだ」

「……………感じるって、何を？」

「オドや生命力を感じてそれを練るイメージをするんだ、成功したらオーラが出る」

「おい、どうやって感じると!？」

「……………まあ頑張れや」

「無責任だなあおい!!」

「無駄口たたく暇があるならとっと感じるんだな」

そういつてアディは部屋を出て行ってしまった。  
……仕方ない、瞑想でもしながら頑張りますか。

~~~~~

時間が経ち、夕食だと呼ばれたので俺は集中させていた力を解いた。
「どうだったカルト、なにかできたか？」

「ああ、青色と赤色のオーラが出たぞ」

「それは珍しいな、青色は魔力で赤色が気力だ、この二つが一緒に扱えるやつはめったにいないんだ」

「そうなのか」

「ちなみに量はオーラの大きさが大きいほど多く、その色が濃ければ濃いほど純度が高いとされている」

「量のほうはわかったが、純度ってどういう意味だ？」

「簡単に言えば、純度が高ければ高いほど少しの量で大きな力を発揮できるんだ」

「そうか……、もうそろそろ食べようか」

「そうだな」

その後俺たちは夕飯をたいらげ、明日に備えて早めに寝ることにした。

第五話：落下物に注意

朝、目が覚め窓から入る光を感じて目を細める。

寝巻きなどを持っていないので昨日着ていた服そのままです寝ていた
ので着替える時間は不要。

とりあえずやることもないのでアディの部屋を訪ねた。

コンコンコン……………。

「アディ、起きてるか？」

「ああ、今荷物を確認しているところだ、準備ができているんだっ
たら先に外で待っていてくれないか、あと少しで終わる……………」

「わかった、早くしてくれよ」

そういつて俺は外に行こうとして――

「てオイ！朝飯どうするんだよ！？」

「経費節約だ、次の村で朝飯兼昼飯だ」

「…………マジかよ」

~~~~~

その後、準備が終わったアディの荷物をいくつか持って村を出た。

ザッ、ザッ、ザッ、ザッ、

「なあ アディ」

「なんだ？」

「こんなところにもモンスターとか出るのか？」

「出るには出るが低級モンスター、つまり無害なやつしか出てこないぞ」

「有害なモンスターとかは出ないのか？」

「ああ、この時期のこのあたりは色々な事情のおかげで『平和』なんだ」

「『平和』ねえ」

思った以上に安全な旅になりそうだが、モンスターをばったばったと倒していくのも面白そうだったんだが。

そんな会話をしていたな……、とか回想していた俺はアディに訊ねる。

「なあ、アディは確か無害なモンスターしか出ないっていつていたよな」

「ああ、確かにいつていたな」

「じゃあ今さっき降ってきたこいつは無害なのか？」

「いや、上級モンスターの中でも一、二を争う位強いモンスターだ……」

俺たちの目の前にはモンスターがいた……………。

鋭い爪、硬そうな鱗、黒く塗りつぶされた体、燃えるように赤く染まった目、

体高は2、3mはある、頭から尻尾の先まで測ったら5m位になるだろう、

翼を両方とも広げたら7、8mはありそうだ。

「なあアディ、こいつは何なんだ？」

「ブラックドラゴン、または黒龍種……………の子供だ」

ヒュウウウウウウウウウウ

パンツ！！

「うわっ！？」

「くっ！？」

突然ドラゴンの体いる場所からから強烈な風がおしよせてきたと思つた瞬間、すべてを飲み込むように光が世界を塗りつぶした。

「何だ！？」

光がおさまり、周りの景色が戻ってきたときには黒い龍はいなくなっていた。

龍のいた場所にはいつの間にか少女が立っていた。

## 第五話・落下物に注意（後書き）

書き方などで何か悪い点などがありましたら指摘してくださるとうれしいです。

次回は少々長めに挑戦してみようと思っています。

## 第六話：仲間と町と空腹と（前書き）

ようやく受験が終わりました。受験勉強ばかりやっていたためか久々に書いてみたら駄文しか書けませんでした（泣）  
こんな駄文ですが読んでいただければありがたいです。

## 第六話：仲間と町と空腹と

.....。

「なあアディ、どういことなんだ……？」

「……たぶん、さっきのブラックドラゴンが人化したんだろう」

「人化？」

「モンスターには知能が高く、人と共存する種もある。そういったモンスター達がこちらの生活に合わせられるようこちらの姿に変身するんだ、それを人化と一般的に呼んでいる」

「詳しい説明ありがとさんと、つまりはあの女の子がさっきのブラックドラゴンなんだな」

「そいことだ」

「さらに確認するがむこうは話し合いを希望しているんだな」

「たぶんな」

人化したということは戦闘意識が今のところ無いということだ、つまりは何か伝えたいことがあるということだろう。そい意図があつてアディに確認を取っていると――

「お兄ちゃんたち~~~~~!!」

その女の子がこっちに歩いてきながら声をかけてきた。

~~~~~

「へえ~~~~、家出中ねえ」

「そうなのよ！！お父さんもお母さんも『外は危ないから出てはだめだ』とか念押ししてくるからついね」

「てつ、動機が単純だ！！」

黒龍の少女？（龍種の年齢はそれぞれの種類で外見の年齢と実年齢とに差異が出るものらしい）は俺たちに同行する事になった。

単純な動機だが家出している事には変わりなく、ちよつと心配になった俺が誘ったわけだが……………。

「とつ、そついやまだ自己紹介していなかったな。俺はカルトだ。で、こつちの兄ちゃんがアディだ」

「よろしく」

「私は黒龍種のミナ、よろしくね！」

ちなみに今は街道を歩いている途中、まだまだ街には着かないとのこと。

ということでお互いの自己紹介を歩きながらする事に。

「ところでお兄ちゃん達はどこに向かっているの？」

「この先にある街だ、まあもうすぐ着くだろう」

~~~~~

「やっとついたー！ー！」

「ついたついたー！」

「そんなにはしゃぐことか？」

カルトたちはミナと出会ってから一時間ぐらい歩き続け、ようやく町に着くことになった。

そのころにはカルトのテンションはおかしくなっていた。それもそのはず、なぜなら……。

「早く飯食いに行くぞー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

人体の耐えられる空腹感をだいぶ通り越していたからだとか…。



## 第六話：仲間と町と空腹と（後書き）

次回はもっと良いものを仕上げるべく長期にわたって書き溜め、推敲を繰り返そうと思います。また長い間更新しないと思います。本当に済みません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8470h/>

---

異世界の迷子？

2010年12月11日00時05分発行